經濟論叢

第七十卷　　第三號

理論經濟學特集

貿易利益の測定について……阿　部　　統　(1)
貨幣的循環への錯誤中心的接近……馬　場　正　雄　(16)
國際的觀点からみたケネー學說の生成と
その政策的含意……菱　山　　泉　(41)

(昭和二十七年九月)

京都大學經濟學會

國際的觀点からみたケネー學說の生成とその政策的含意

——ケネー學說における政策的背景（二）——

菱山　泉

まえがき

ここで取扱われるのは、まず學說生成にかんする一つの問題、ついでそれを貫く政策的指向の積極的規定の問題である。つまり、學說の生成をめぐって、現實に對するケネーの政策的對決の樣式を內面的にほりさげ、その中からかれの政策的意欲ないし意圖を抽出したうえで、それを前提として、そこから、いわゆる「重農主義」とよばれるケネー學說のになう國際的政策課題を、すなわち、『經濟表』世界にひそむ政策的含意の一つ——ケネーの國際經濟的構想——を、究明する試みである。それは、いわゆる「アンシャン・レジームの危機」に對するインターナルな政策的構想——『經濟表』世界にひそむ基本的課題——の体系的性格づけにたいする前提的な枠組を與える。「重農主義」の政策的效果と現實への滲透——それは「フィジォクラート運動」といわれている——の分析に基づ

くその歷史的性格の規定の問題[1]は、少くともみぎの二つの仕事のうえに立脚することが適當である。

(1) この問題についてのユニークな研究として、河野健二、アンシャン・レジーム下の「地主的」改革――フィジオクラート運動の性格――、（京大人文科學研究所紀要第七号、十八世紀フランス、一九五二、二二―三三頁）がある。

一

ケネー學說は七年戰爭をめぐる內外の狂乱を機緣として生成した[1]。この短い言葉に表現された、かれにとつて運命的な西歐世界、それはケネー學說のもつ政策的性格の考察にとつての礎石をなすものと思われる。ときまさに、近世初頭以降のいわゆる國際商業戰をめぐる世界經濟圈の枠組が崩壞して、新しい秩序がイギリス重商主義の經濟的覇權を基軸として律動してゆくための轉向点にあつたといえよう[2]。

この西歐世界の動きに對して、ケネーはいかなる關心をよせていたのか。それに關して、かれは世界貿易圈における覇權の移行と貿易中心地の浮動性という、さだかな國際經濟的現實[3]を基抵的に左右する要因を見究めようとはしなかつたであろうか。いわゆる國際商業戰がかれの政策的視野にどう映じたのであろうか。

かれは、コルベールによせて、つぎのようにいつた。「この大政治家は、おそらく、商船隊や轉賣貿易が、運送ないし再轉賣することの可能な商品の量に比例してのみ存するということ、それ自体、このように制約された貿易は若干の都市によつて營まれるにすぎないこと、……ハンザ同盟がヴェニス・ジェネバ・フローレンスの絢爛たる貿易を壞滅させ、ブリュージュが殆んどハンザ同盟を併合し、さらにブリュージュの廢墟にたてられたアンヴェル

スが滅亡して、遂にはアムステルダムの大貿易を勃興させたことを、十分觀察しなかつたのであろう。……コルベールが現在いきていたならば、ロンドンがアムステルダムを滅すさまを看るであろう」[4]と。ここから、つぎの諸点がひき出される。第一に、いわゆる仲介貿易体制 commerce de trafic ou commerce de revendeurs の不安定性の指摘である。かれは、諸貿易都市・諸國家の交替と衰亡の過程をみたうえで、それらのとるシステムを包括的に仲介貿易体制と刻印し、かかる特殊な貿易体制の中に淘汰的な歴史的推移の動因を見出した、いいかえれば、かれは、それら諸國の道德・慣習体系そのものや單なる政治的形態に、歴史の發條を見たのではなく、フィジークな經濟体制の中にそれを求めた——この点が傳統的なモラリストの集團から彼をエコノミストの始祖にまで卓越させた所以であるが——のであつた。こうした上で、そのシステムのもつ浮動性・不安定性の根據を、ここでは轉賣可能の商品量に依存するということに見出すのであるが、この一見漢たる解答には、つぎのような含意がひそむ。すなわち仲介貿易で取扱われる商品は「國民的」レッテルをもたない、従つて、仲介貿易それ自体は別に自國の生産的基礎に依據するか否かに無縁だということ、すなわち、それを營む諸都市・諸國家は「あらゆる國民にひとしく寄生し……全く祖國をもたない」(Œuvres, p. 459) ところの「商業共和國」 république commerçante の單なる構成部分だということ、である。つまり、かかるシステムにひそむ不安定性の根源的要因は、かれによれば、それが國民の生産的基礎に基づく必然性をもたない、他律的かつ従屬的な性格をもつ点に求められた。

さらにもう一つ。國際商業戰の擾乱的性格の指摘をひき出しうる。それは、かれの眼に、あらゆる平和の名に値しない、恣意的な無秩序と映ずる。ところで、この擾乱をみちびく誘因の一つは、また——ケネーのロジックをおしつめれば——生産的基礎に立脚しないという仲介貿易システムのもつ性格にあるということになる。というのは

「(仲介貿易をとる)　群小商業國が貿易をいとなみえたのは、かれらの土地に即應してではなくして、他國の土地に即應してであり、……これらの小國は圣貿易圈の取引を行つていた[5]」ので、支配的貿易圈を獨占することが、これら諸國の不可欠の存立條件――かれは更に進んでそれは貿易商人と製造業者の利益獲得の條件だとみなしたが――となり、そこから、いきおい相剋的無秩序の世界が生れると考えたからである[6]。

以上、國際商業戰にかんするケネーの批判的な洞察――それは安定的・平和的秩序へのかれの根强い願望によつて貫かれていたのだが――をみることによつて、かれのロジックの發現の過程を摸索しうるであろう。すなわち、かれの洞察は、まず仲介貿易体制の不安定性とその擾乱性の抽出に深められ、さらに一歩を進めて、その背后に、國民的生產基礎――それはいわば自然のエネルゲイヤと產出源という半ばアプリオリな確信をこめて、素材的な「土地」と規定せられた――との基抵的な關連性をさぐりあてていつた。そして、國際商業戰の「混乱」désordre の原因をば、それぞれの國民の經濟体制が生產的母胎たる「土地」の產出力に礎石的に基づかないことに求めた。かようなケネーの分析視角とその推理過程は、當然に、西歐の平和的・安定的な經濟秩序の再建――それは、國際經濟關係の推移とその態樣如何が、それに關連した諸國の內部構造に反作用し、それを變容させると共に、その經濟政策の指向を決定するという意味から、フランスの運命にとつて決定的な――の構想にあたつて、生產源としての土地を主軸とした經濟体制とその線にそつた政策とを積極的に且つ原理的に押し出すであろうことを既に豫見させうるのである。ともあれ、以下、國際商業戰の地平に浮沈した諸國を抽出して、それに對するケネーの批判の內容と分析の性格とを檢討してみよう。

(1) cf., A. Oncken, Geschichte der Nationalökonomie, 1922, ss. 316-317. Œuvres de Quesnay, pp. 126-127, note 1

par Oncken

(2) 大塚久雄、『近代欧洲經濟史序說』(上巻) 六九—一六四頁、とりわけ一一九、一四六頁を參照されたい。

(3) 當時のネオ・マーカンティリストの巨頭の一人たるフォルボネ (Forbonnais) が『百科全書』の「商業」項 art., Commerce において示した貿易政策・貿易史、なかんづく近世以降の國際經濟の展開の分析は、當時の代表的水準を示しており、國際經濟にたいする十八世紀の關心の深さを測る一指標である。cf., Encyceopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, tome 8e, pp. 622-638, art., Commerce par Forbonnais.

(4) Quesnay, Répétition de la question au sujet du bénéfice que la fabrique des bas de soie établie à Nimes produit à la France, 1766, Œuvres, p. 420, Note (1) なお、これと同じ基調を示すものとして、Quesnay, Impôts, Revue d'h. éco. et sociale, 1908, pp. 147, 149-150 を參照。

(5) Quesnay, Répétition, Œuvres p. 420, note 1.

(6) cf., Quesnay, Remarques sur l'opinion de l'auteur de l'esprit des lois concernant les colonies, Œuvres, p 435; Du commerce, premier dialogue entre M. H. et M. N., Œuvres, p. 489; Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et le commerce, Œuvres, p. 294 note 1.

二

コルベールが死の直前に王に提出した『覺書』[1] (一六八一) に記された「フランスの勢威に均衡しているただ二つの國、イギリスとオランダ」について、ケネーはどう對決したのであろうか。まずオランダから始めよう。ところで、コルベールの言葉にもかかわらず、ケネー學說の生成の頃には、この國をうるおした往年の繁榮ぶりは見るかげもなかつたのであるが、その國についてケネーは、「國民の利益も本國・植民地の利益も政治團体の利益もただ

貿易によつて結合された」純粹に商業的な國 nation purement commerçante といつた。[27] ところで、オランダのもつ貿易体制はいかなるものか、また何故にこの國はしかじかのシステムをとらざるを得なかつたのか。この疑問に對して、ケネーはこう答えてくれる、オランダは「殆んど土地からの收入がないので、仲介貿易と手工業がもたらす利得からしか、富をひきだしえないような國」の一つであり、「アンヴェルスを荒廢させることによつてその仲介貿易を維持している」[28]と。

だから、オランダが仲介貿易をとらざるをえなかつたのはやや運命的でさえあると思われたのかもしれない。というのは、ケネーが國際分業の基礎として、國々の自然的＝土地的ミリュの態様を礎石としながら、――かれはそれが歷史的に變容されるという面よりはむしろ、自然的に固定化され決定されると考えていたかのごとく――原理的に「農業國」對「商業國」という對抗的範疇――歷史的範疇ではなく自然的な超歷史的空間的な範疇――を分つたのであるが、ケネーはオランダを大体において「商業國」という範疇で把握していたから。[29] つまり、土地――ケネーにあつてはあらゆる「もの」の產出力源――に乏しく、從つて「土地の生產物」、ひいては「土地の收入」に乏しいので、やむなく、「仲介貿易」に從わざるをえないという側面を、オランダはもつと考えられたのである。だからこそ、――フランスを諷刺しつつ――「自國の土地からの生產物によつて、國產商品を基軸とする大貿易を營みうるような……大國は、このような小國のとる方策を範とすべきではない」[30]ということもできたわけである。それがその國にとつて不可避的なものかどうかは別として、とにかくオランダは仲介貿易体制を主軸としていたがために、その持前の性格〔それについては前項に述べた〕から、自然に、「ロンドンによつて滅されてゆく」星のもとに生れていたわけである。

ところで、かれが政策的ないし戦術的な考慮から、またそれと同程度にかれの胸奥にひそむ確信から、重厚なる緬衣を纏わせた「自然」という『最后の言葉』に制約されて、その本性上「農業王國」Royaume agricole として刻印されたフランスは、原理的にいつて、その對極的本質をもつ「商業共和國」[6] République commerçante のシステムを採用し具現しえない筈であろう。ところが、この筋道に反して、實は「商業國」オランダのシステムに魅了され、進んでこれを採用したのが、ほかならぬ「農業國」フランス——西歐世界で最も肥沃な領域に惠まれていた（こうケネーは考えていた）ところの——であつた。「まさにこのオランダ的法制によつて、わが植民地が國民の手から引離されて、本國の運送商人にゆだねられ、またこの法制のために、國家の利益・國民の利益・本國の利益・運送商人の利益が混同され、植民地の利益は、本國という假面をかぶつた運送商人の獨占的特權の犠牲にされた」[7]のである。

さて、このオランダのシステムを輸入した立役者とかれに目せられていたコルベールにたいする攻撃は隨所に辛辣な言葉を殘しているのだが、ケネーは、「廣大な領土をもつ」その本性上「農業國」たるべきフランスが仲介貿易体制をとることのうちに、單に不安定性とか擾乱性をみただけではなく、さらに進んでフランス經濟社會の内部的な混乱を看取し、その全面的な崩壞の可能性を豫感した。そこに、かれはコルベールの施策に含まれた根源悪を見出していた。

そうはいつても、何故に、「農業國」と「仲介貿易」体制とは、そのように背反的かつ侵害的な關係をもつているのか。この点を解明するためには、ケネーの視野に投影されたコルベールティズムと仲介貿易の内容——特殊的な含意をになつた——を把握し、そのうえで、それに關するかれの批判の要点とその推理過程を檢討してみなけれ

ばならない。

かれがいうコルベールテイズムとは、端的にいえば、その体制の主觀的起動ないし政策目標として、「貿易差額」主義による金銀ないし貨幣の獲得をかかげ、産業構成的には、「工業を基軸として構成された貿易ないし仲介貿易」を意味していたものと解せられよう。[9] ところで、そこでいわれる「工業」とはいかなるものか。それは、「大麻・亞麻・羊毛の價値を大いに增加する一般むきの麻織物・毛織物製造業[10]」といつた、農村的な獨立工業ではなくして、「〔國產の〕羊毛の使用を削減するような、外國產の絹糸・木綿・羊毛を原料とした織物製造業[11]」すなわち奢侈品製造業 manufacture de luxe であつた。そして、かかる製造業は仲介貿易の廣い輪の基軸ないし結節点をなすものと考えられた。したがつて、ケネーがコルベールの体制を問題にしていた場合に意味していたのは、手工業品ないし奢侈品の輸出と外國原料の輸入を素材的構成內容とした、「奢侈品製造業」を基軸とした仲介貿易体制であつたし、その限りにおいてトラフィーク trafic といつた場合にはこのような含意がこめられていたものと看做してよいであろう。[12]

ところで、かれはこう考えたシステムをどう批判したのか、また、その推論過程はどうであつたか。まず、かかるシステムの基軸をなす製造業が、いわゆるトラフィーク的工業のゆえに、當然のこととして、原資材獲得の側面で、素材的に自國の生產母胎たる土地に直結せず、內部市場にたいして梗塞的效果をもたらすから、却つて農業生產を縮小化＝衰退させる傾向をもつ。とはいえ、少くともかかる製造業に雇われる労働者の生活元本の購入という点で、土地＝農業生產に對する市場緩和的效果をもたらし、そこから再生產を――購買面から――刺戟するのではないか。いな、ケネーによれば、そこにこそ、人爲的に强引に生產的基礎をきり崩すところの、この体制のもつ欠

陷がひそむという。というのは、「外國よりも製造費や手間賃を安くするために、わが國の小麥の價格をきり下げ」かくて、「穀物の輸出貿易が禁止され……國内の小麥の販賣は勝手氣儘な取締りに從わせられた」[13]から。いわば、國際商業戰にかちぬくために――その起動は貨幣的富の獲得にあり、その政策的學説的表現は「貿易差額説」という「俗見」 opinion vulgaire にあるとされた――「製造費の低廉性の維持＝労賃の切下げ＝穀價の引下げ策が採擇され、そのために、穀物輸出の禁止・國内的自由取引の梗塞が普遍化し、獨占的特權商人に穀物市場を壟斷され、かくて、農業生産は穀價の低廉のゆえに收益可能性を失い、結局、縮小化してゆく。しかし、そうはいっても少くとも貿易面で蓄積された貨幣資本は産業的に農業に投下されないのか。いな、當面の政策的態様と財政的・價格機構を考慮する限り、いかなる資本も農村から逃避することこそあれ、そこに「還流する」ことはありえない。それは再生産機構に對して侵害的に二律背反的對極の不均衡をば一方の犠牲においてますます尖鋭にするのみ。[14]

かような政策の現實的效果について、かれはつぎのように、いうことができた。「この政策のゆえに、われわれは……相互的な貿易を消滅させた。……われわれは製造業でつかう原料を法外な價格で、しかも密輸によって購入している。美しい織物を製造し、これを販賣することによって、數百億を儲けるかわりに、自國の土地からの生産物に關して數十億を失った」[15]と。また、「人間と貨幣とが農業からひきぬかれて、外國産の絹・木綿・羊毛を原料とする製造業〔トラフィーク的な奢侈品製造業〕につかわれた、かくて、そのために國産の羊毛を原料とする製造業と羊の增殖とが阻害されている」ともいいえた。[16]

かれのいわゆる「オランダの貿易に眩惑された前世紀の一大臣」の創設になる政策体系は深刻にフランスの内部構造にくいこみ、これに反作用する。いまこそ、强力な新政策体系をば現實的な經濟的所與の下に推進させ、新機

軸を樹立すべき秋であるのに、依然として、コルベールの政策的傳統は牢固としてぬき難い。ケネーのギリギリの政策的願望をよそに、時間は容赦なく、「農業國」の經濟的力源たるべき土地＝農業を全面的に、物理的かつ決定的に、崩壞させようとはする。多少とも愚かしさを含んだ「人爲」の盲目的な營みでも結局には神の攝理に導かれて「自然」の顯現に與るなぞと靜觀する餘裕をば、アンシャン・レジームの現實は、ケネーに與えておきはしない。「自然」の掟を「知る」ことなくまた「行う」ことがなければ、あとは「破滅」である。まことに、トラフィー的な工業を主軸とした仲介貿易システムは、かれにとつて「農業國」の致命的な病原であつた。[17]

(1) E. Levasseur, Histoire du commerce de la France 1er partie : avant 1789, Paris 1911, p. 367

(2) Quesnay, Remarque, Œuvres pp. 429-430

(3) Quesnay, Impôts, op. cit., p. 147

(4) 「農業國」と「商業國」との對立についてはル・トゥローヌの所說にくわしい。cf., Le Trosne, De l'intérêt social, Daire, Collections, tome 2, Physiocrates 2e partie, pp. 979-981 なおメルシエ・ド・ラ・リヴィエールの Mercier de la Rivière, L'ordre naturel, ibid., pp. 565-538 も參照されたい。なお、ケネーがオランダをもつて、全き「商業國」となしたとするには幾分の留保を要す。(cf., Quesnay, Hommes, op. cit., p. 30) ル・トゥローヌも「オランダは部分的にしかこのケースに屬さない」(cf., Le Trosne, op. cit., p. 980) と述べた。だから、ケネーがそれをもつて「純粹の商業國」といつた場合、かかる留保を附しておきたい。

(5) Quesnay, Impôts, op. cit., p. 147

(6) cf., Quesnay, Observations importantes, Œuvres pp. 326-328

(7) Quesnay, Remarque, Œuvres p. 434

(8) cf., Quesnay, Note sur la Maxime VIII, Œuvres p. 343 ; Impôts, op. cit., p. 186

(9) cf., Quesnay; Œuvres pp. 193-194, 208, 343-344 ; Homme, op. cit., p. 54 et note 1

(10) Quesnay, Grains, Œuvres p. 193

(11) Quesnay, Homme, op. cit., p. 65

(12) cf., Quesnay, Grains, Œuvres pp. 193-194 いうまでもなくここで問題とされているコルベールティズムとは、ケネーの政策的視野に投影された限りでのシステムをいうので、それに對するわれわれの歴史的規定と一應きりはなして考えてもよいであろう。事實今日のコルベールティズムの評價とケネーのそれとが相違していたとしても、けだし當然のことである。

(13) Quesnay, Note sur la Maxime VIII, Œuvres p. 343

(14) スミスが重農主義批判の章で、自己のポジティヴな批判の地ならしのために、重農主義學説の內在的解明の一コマとしてコルベールの政策に言及したのだが、敍述は殆んど正確にケネーの意向を傳えているように思われる。 cf., Wealth of Nations, Modern Lib., p. 628, 大內譯、國富論、三、四三六—四三七頁。

(15) Quesnay, Grains, Œuvres p. 194

(16) Quesnay, Note sur la Maxime, Œuvres p. 343

(17) フィジオクラートの商業の類型ならびに仲介貿易の性格の把握については、つぎの如きケネーならびにその弟子たちの著作を參照されたい。 cf., Quesnay, Œuvres, pp. 193, 233 236, 262 note 1, 294 note 1, 323, 333, 343-344, 669, Homme, op. cit., p. 62 sq. ; Baudeau, Premiere introduction à la philosophie économique, op. cit., pp. 726-727 ; Le Trosne, De l'intérête social, op. cit., pp. 970-971.

III

十八世紀の人たちのイギリス像について、E・ドウピートルは「ライバルとしての、またモデルとしてのイギリス」といみじくも看破した。[1] このイギリスの經濟体制について、ケネーはどう考えていたのであろうか。

ところで、かれはオランダに對比しながらイギリスのシステムについて、次のようにいつた。「オランダ人は商品を再轉賣する仲買人で仲介人である。……それに、かれらが販賣する財貨は自國の生產物ではない。……イギリス人の貿易は、その大部分が自國の生產物の販賣から成り立つている[2]」と。つまり、イギリスのシステムはオランダのそれとは異なつて、自國の生產物の輸出に基づく、從つて素材的にみて全面的に自國の「土地」の生產＝農業に立脚した輸出貿易体制だと看做したわけである。かくて、「國民的」生產基礎としての農業の「增進的繁榮」の秩序を礎石としたシステムをとるかぎり、イギリスは「實質的富」 richesses réelles の增大に依據した「富裕」と「强勢」を維持しうるものとして映る[3]。

さて、さきに「農業國」對「商業國」との對抗をとり出し、オランダ・フランスについてそれぞれの特徵的性格とされたものに關說したのであるが、一体、イギリスはどう看做されていたのか。事實、ケネーがこの國にかんしてその適切な經濟政策について語つたさいに、それが「農業國」的指向 ——少くとも「農業國」にとつて「自然的な」政策的基調——をもつと考えたかにみえる言質を引き出すことも可能である[1]。しかし、かれにおいては、フランスに對するイギリスの構成上の相異を指摘することもできた。すなわち、「イギリスでは、植民地だけではなく母國の諸地方までもが運送の商法に從わせられている。……また、そこでは土地や國家の利害が商人の利害に從屬する。しかし、かかるカルタゴ的な制度は、もとより、君主國のモデルとしては役に立たない。なぜなら君主國の政策や利害は運送貿易のそれとは鋭く背反するから[5]」といつた。かくて、ケネーのイギリスは、國際分業上の立地的基礎——かれにあつては自然的觀点が貫かれていたが——において、フランスと同樣に、「農業國」的指向を示しえたとはいえ、その政治的階級構成において、つまり經濟的利害がいかなる階級によつて掌握ないし支配され

國民的利害がいかなる階級の利害に從屬するかという点に關しては、イギリスの構成はフランスのそれから決定的にかつ原理的に區別される、いな區別されるべきものであつた。つまり、イギリスでは國民的利害は商人のそれに從屬し、商人が「經濟的統治」の支配者であるのに、フランスでは双方の利害が相容れることなく背反していることを强調した。ケネーはイギリスの政治制度の背後に商人の利益とその經濟的支配を看取し、それがフランスの政治的外衣の底にひそむ經濟的利害と全く相違していることをみた。

しかし、英・佛の政治的構成の相異は別としても、フランスでは貿易＝商人の利害 〔「轉賣貿易の財産は國民によつて轉賣商人に支拂われる利得からなり立つ」(Œuvres p. 461)〕と農業＝國民の利害〔「國民の財産とは土地のことである」(Œuvres p. 461)〕とは鋭く背反するとせられたのに、何故に、イギリスでは兩者の利害は背致しないのか。かような相異をきたさしめたものは、端的にいえば、兩國のとる貿易体制の根本的な相違であつた。すなわち、フランスでは、ケネーのいわゆる「仲介貿易」システムをとるために——それと連關的に透視される內部構造を礎石的に媒介することによつて——商人・製造業者の利益の下に、「農業國」的基礎たる「土地」を破壞し、かくて、「耕作者」・「地主」＝「國民」の利益を侵害してゆくのに、イギリスでは、これに反して農業生產に好都合な自由な「生地生產物」の輸出貿易システムをとるために、その限りにおいて、「國民」の利害と商人の利益とは背致しないとせられた。また、かかるシステムと、それを推進する政策的補强によつてこそ、その「富裕」と「强勢」をフランスの「混乱」と「疲弊」のまえに誇示しえたものと考えられた。だからこそ、「イギリス人は、外國貿易の利益と貿易商品の生產に必要な支出とに關して、われわれよりもよく知つているので、かれらのなす貿易上の諸施策において、耕作者の支出や利益を看却することが決してない」[6]といいえたわけである。このゆえにこそ、かれの觀

察の地平にイギリスのみが國民的な生產基礎のうえに立ち、かつその利益を促進するシステムとして典型的に登場してくる。フランス重商主義の崩壞とイギリスの商業覇權の確立をまのあたりにし、七年戰爭といつた冷酷な現實に裏づけられて、それのみが――フランスとの政治的構成の相違を指摘されたとはいえ――ゆるぎなき安定と發展の鑄型としてケネーの政策的視界に刻印されたといえよう。

以上、いわゆる國際商業戰――……近世社會の生成にとつての宿命的ともいうべきデモーニッシュで暴力的な、いわば擴大された原罪過程――という現實に眞向から對決し、西歐世界を「擾乱」の巷と化した歷史的陶汰の過程に浮沈した諸國民のあいだに、構造的に「仲介貿易」体制を抽出したうえで、國際的現實の不安定性と擾乱性との根源的動因をば、――その內部構造への反作用にたいする具体的洞察を媒介することによつて――習俗（ムールス）の側面にではなくて、フィジークな側面に、すなわち、經濟体制に、「仲介貿易」システムに、焦点づける。さらに、諸國民の政治・經濟の構成上の具体的檢証を介して、またそれぞれの現實的效果の考量を經て、「仲介貿易」体制の性格を究めようとするかれの努力は、それと「土地」＝「農業」との關連性に、――その關連性の否定を通してではあるが――收斂される。この体制に鋭角的に對立したイギリスの「輸出貿易」システムは、いわば導きの星としてケネーの視界を照射し、それに對する洞察の眼光は「土地」＝「農業」の礎石に、――デイスムの確信に裏打ちされて――一義的にしかも奥深く、穿貫してゆく。そこにこそ、重農主義生成の政策的基盤の一つが伏在しているといえよう。[7]

とはいえ、このような政策的對決と現實分析のプロセスをつらぬき、一貫してケネーのいわば發條 ressorts をなしていたものは何であろうか。昇天したコルベールに向つて「轉賣貿易を大いに鼓吹して政治を混乱させた」

罪責を詰問しつつ、大膽に現實に挑みかけた巨人をかりたてた政策的意圖はなにか。「いかなる戰爭の動機をも暗示しない、全き平和の秩序をなす貿易上の自然秩序が確立されたならば……」[8]、この一言にひめられた西歐的な『安定的な平和的秩序の再建』の意欲、これこそ、かれの分析の鋒先をぬい、その洞察の布地を貫いていた鮮明な一筋の糸であつた。

(1) Ed. Depitre, La Noblesse commerçante, Revue d'hist. écono. et sociale, 1913, p. 148.

(2) Quesnay, Hommes, op. cit., p. 62

(3) cf., Quesnay, ibid. p. 66, Œuvres pp. 234, 431 この基調はヴォーバンに一致する (cf., Vauban, Projet d'une Dixme royale (1707), Collections, nouvelle éd. Alcan, 1931, p. 25)

(4) cf., Quesnay, Œuvres pp. 160, 174, 175.

(5) Quesnay, Remarque, Œuvres p. 429

(6) Quesnay, Impôts, op. cit., p. 150

(7) ケネー學說生成にたいする思想的媒介については、すでにオンケン・ハスバッハ・デュポワ・ウーレルス・久保田各教授によつて、或いは主題とされ或いは取扱われた。少くとも社會哲學的思想は、ケネーの經濟學体系の生成にたいして自動的にかつ外から働きかけたわけではなく、ケネーの現實にたいする政策的對決の場を通して、内から確証され攝取されたと思われる。ここでは、貴重なる研究遺産をうけて、体系生成の基軸と考えられるケネーの政策的對決に焦点がしぼられ、對決の様式をジェネティークな推理の糸をぬつてほりさげ、そこに一貫したかれのインテンションを抽出しようとした。かような試みにおいて、横山正彦氏、『ケネー商業論とその歴史的意義』經濟評論、昭二十三年、三・四月号から多くの示唆をうけた。なお、學說生成の思想的媒介についての諸家の見解については次のものを參照されたい。このような視角からして、そのうちとくにN・J・ウェアとウーレルスの見地に共鳴する或るものを見出した。A. Oncken, Geschichte der Nationalökonomie, 1922, ss. 339-341, 342-344 ; M. Beer, An Inquiry into Physiocracy, 1939, pp. 52-72 ; G. Weulersse, Les Physiocrates,

1931, pp. 172-218 ; A. Dubois, Quesnay anti-mercantiliste et libre-échangiste, Revue d'économie politique, vol. 18 (1904) pp. 223-224 ; Dubois, L'évolution de la notion de droit naturel antérieurement aux Physiocrates, Revue d'hist. écono. et sociale, 1er année (1908), pp. 245-246 ; Norman J. Ware, The Physiocrats : A study in economic rationalization, The American Economic Review, vol. XXI, Dec., 1931, pp. 618-619 ; L. Cheinisse, Les idées politiques des Physiocrates, 1914, pp. 25-27, 180

(8) Quesnay, Du commerce, Œuvres pp. 489-490

四

既述のように、ケネーの學說の生成の過程を貫いて、西歐世界的な視野からするフランスの平和的な安定的經濟秩序の再建という政策的課題――それはいまだ批判体系の網の目をぬう、政策的意欲としてであつたが――が潛在していることを指摘した。すなわち、ケネーはせまい國內經濟的見地から――國內經濟の利害にたいする考慮のみによつて――ではなく、ひろい國際經濟的見地から、どうすれば、フランス社會を國內政策によつて、平和的で構造的に安定した水準にまでひきあげ、これを改造できるのかということに心を碎いたのである。とはいえ、それは積極的かつ建設的に何を指向していたのであろうか。それを解明するために、まずケネーの自由貿易政策によつて政策的なモデルとしておし出されたシステムを明確に把握しなければならぬ。

ケネーは『人口・農業・商業に關する重要なる質問』（一七五八）――それはアカデミーおよびその他の地方諸學會へのアンケートをなしていた――において、「相互貿易 commerce réciproque において最も多く利得する國民とはいかなるものか。それは、土地からの商品よりも手工業品の方をより多く外國から購入し、外國にたいして

手工業品よりも自國の土地からの商品をより多く販賣するような國民をいうのではあるまいか。」[1] といつた。この『質問』によつても既に明かなように、ケネーが政策的に強く要望した貿易システムとは、自國の「土地生産物」の輸出を基軸とし、これに從屬的、というよりはむしろ對應的に、外國の「手工業品」marchandises de main-d'oeuvre の輸入を伴う貿易システム、いわゆる「相互貿易」[2]であつた。オンケンはこの「相互貿易」の思想がカノニストの、とりわけウロア Ulloa の commercio reciproco に類似——ただ自由制度かどうかという点で異なる——することを指摘しているが、われわれにとつては、むしろそれが、内容的にみて彼の意識に投影されたコルベール的な貿易制度の逆倒的体系に近いということの方がより重要である。さらにそれは、「賣手と買手が互に利益をうけ、商品自体のなかに賣手・買手が相互に利得を見出し、仲介商人がその利得を侵し破壊することのない」ところの「良き貿易」[5] bon commerce、つまり、完全な自由貿易制度でなければならぬ。この自由貿易の主張が、「貿易における獨占が……余りにもしばしばその擁護者をみいだし、……穀物の「輸出」貿易の自由と外國の手工業品の輸入が禁止され、王國の製造業は獨占的特權を獲得し、……製造業の企業家は自國原料を排して外國の原料を使用することを余儀なからしめられた」現存体制にたいする鋭い批判と克服の武器であると共に、それはまた、「たえず一般的福祉のヴェールの下に要望され陰蔽された私的利益によつて顚倒された自然的秩序」[6]の再建の鍵であつたことはいうまでもない。

しかし、かかる内容をもつ自由な相互貿易制度の設定は、ケネーの体系的關節として、積極的にまた窮極の歸趨においていかなる体制を指向していたのか。これに答えるためには、かかる國際經濟制度が國内經濟にいかなる作用を及ぼし、いかに連關すると考えられたかを明かにしなければならぬ。

さて、「土地生産物」すなわち「農産物」の輸出を基軸とした自由な貿易体制の設定は、かれによれば、國際・國内的な完全競爭によつて成立する「自然的な」價格水準たる「良價」bon prix を維持するものであるが、現存体制では「小作人」「富裕な」借地農のこと」は、それよりも低い水準しかうけとつていないために、それ「良價」は「高價」haut prix ou cherté として――「農業企業家」に利潤可能性を與える、すなわち「收入を形づくり支出を回收する價格」として――與えられる。この「良價」の作用によつて、農村に不足している資本は、その收益の見込みにひかれて、自然的に農業部門に還流し投下され、それを元資として「小農法」から「大農法」への經營の合理化的轉換を行えば、農業生産力のより一層の增進を來さしめるのである。それは、當然、農業における「總生産高」produit total の增大を結果し、エクステンシヴに――かれにおいてはインテンシヴな分配的對抗は考察の正面に現われない――「純生産高」＝「收入」の比例的增大をもたらすと考えられた。しかも、「良價」の成立は、「最初の賣手」たる「小作人」の販賣價格である「賣上價値」prix vénal と購買價格たる「消費者たる買手の價格」との差額を減少させ、そこから生じた、獨占商人に奪取されていたいわば流通的分配費用における節約分だけが、自然に「小作人」の手許に流入し、それは結局、競爭の作用によつて地主の「收入」の增加分となる。つまりいずれにしても自由な輸出貿易体制は、「良價」の作用を機能的觸媒として、累積波及的な過程をへて、地主の「收入」を增加せしめるように働く。かくて、この「收入」の增加は、一方――「良價」によつて農業收益が保証されているという前提に立つので――地主の農業創設とその改良のための蓄積的投下と、他方、消費・購買力の增大とを促し、それによつて「年再生産」のより一層の擴大化をきたし、それとともに、自由体制に適應した新興の工業・商業は漸次的かつ自然的に國内に勃興し、いわゆる「不姙的階級」の「利得」額「ケネーにおいてはそれ

は再生産の「費用」と考えられた」さえも、隨伴的に増加してゆくものと考えた。[7]

みぎのように、全面を蓋う獨占体制に由來する農業の沈滯・農業部門での資本の欠乏・破壞的な農産物の廉價といった現存の國内經濟[8]の中に、自由な「土地生産物」の輸出貿易システムを設定すれば、そこに成立を予想される「生産的階級」にとつて報償的な「良價」の、再生産に對する機能的觸媒作用と、それに伴う〔農業〕生産部門への資本の集中效果とを手懸りとして、結局、「純生産」＝「收入」の增加を促し、かくて、その〔「收入」の〕再生産にたいする累積上昇的な效果を基軸とする「增進的繁榮」のプロセスをへて、發展のエナージーを内包しているにもかかわらず經濟的收縮の段階にある現存の經濟社會が、『經濟表』の世界にむかつて、すなわち、「大農法」＝「良耕」を經營的指標とした農業部門を主軸とした經濟の最高發展段階に達した均衡的な「再生産」の世界にむかつて、動的に展開してゆくものと考えられた。この歸趨点にいたる最初の不可欠の關門の扉をひらく政策的な鍵こそ、かの農産物輸出を主軸とした自由な「相互貿易」の設定であつた。[9] しかも、この起動点〔現存經濟社會をモデルとした〕から到達点〔一定の前提が完全に充足されたときの理想的水準〕にいたる動的な過程において、獨占システムに棲息している現存の特權的な奢侈品工業とそれに利害をともにした獨占的な商業とは、自由システムにおいて成立する「良價」による獨占利潤の勦滅過程を通じて、驅逐され、それに代つて、自由な自然的秩序の不可欠の擔手としての工業と商業とが再生される。[10] かかるいわば清掃作用をうけて新しい内容をもつた秩序、また、擴大への刺戟のない靜的な最高の〔終極的〕經濟水準、〔この点においてケネーはボードーからもまたチュルゴーからも異なる〕、それが探究者ケネーによつて透視された『經濟表』の骨格であつた。このように、ケネーは輸出貿易の解放に國内經濟の發展的改造の初發的な發條を求めた。しかしそれは、一、海外需要狀勢に對する樂觀的な展望。二、フランス

經濟社會のいわば生產の彈力性に對する有利な觀測。三、總じて價格機構の自働伸縮性とその生產に對する感度の鋭さについての確信、に依存する。これらの前提がみたされなければ、彼れの政策体系は思惟の世界を離れたときに崩壞するであろう。この点についてはここでは立ちいらない。

しからば、かようにして到達されるべき『經濟表』の世界は、國際經濟的視点からみて積極的かつ建設的に、いかなる政策的含意を擔わされていたのか。これに答えるためには『經濟表』の前提のもつ意味を究明することから始めねばならぬ。

周知のように『經濟表』には、「商業上の自由競爭と農業の經營的富の全面的な安全性とが永續的に存在する場合に、取引諸國民の間に成立する恒常的な價格」[11]が前提されていた。そこで、ここでは國際的に成立する恒常的な價格 prix constants すなわち「良價」を維持するところの自由貿易体制の性格が問題となる。これを明かにするために豫め注意しておかねばならないのは、ここでいわれる自由体制は、既述の、『經濟表』世界を押し出すための——すなわち國內經濟の構造的變革を遂げるための——起動となる自由な「相互貿易」とは政策的觀点から、はっきり區別されるべきこと、である。というのは、政策段階的にいって、前者は、「相互貿易」の設定に始まる累積上昇的な一連の動的過程をへて窮極的に到達された新經濟秩序の前提にすぎないから。このようなニュアンスの相違を考慮にいれておいて、問題の『經濟表』の前提の一つを形づくっている自由貿易制度の性格を檢討しよう。

端的にいえば、それは、均衡的な經濟社會における「再生產」の遲滯なき正常的な運行を可能ならしめる價格水準——比喩的にいって價格はそこではパラメーターというよりはむしろコンスタントとして考えられた——を維持するための機能的な性格を有するものと思われる。つまり、かかる自由貿易システムは、それ自体完結的な

經濟社會の內的循環の枠組としての價格機構をば、國際的交流と感應に解放して恒常的な水準を保持させるための、いわば漏出孔としての役割をもつといえよう。そう看做して始めて、ケネーの一見矛盾したかにみえる論理の糸をたぐりうる。すなわち、この完結的・自足的な『經濟表』の水準に到達したものという假定をとつたうえで、またその假定からうける經濟的ヴィジョンを先取したうえで、そこから、外國貿易――それは『經濟表』世界への政策的起動としては決定的な「基本的」重要性をもつはずであるが――をふりかえつてみれば、「外國貿易というものは、國內商業が十分發達しておらず、自國生產物を〔國內で〕有利に賣りさばきえないような國民にとつては、仕方のないもの pis-aller」とみえたのであり、またそれは、「生產物の價値を維持し、それらの下落から生ずる最大の惡をさけるために不可欠なる必要惡」[12]――これらの語は重商主義者にたいする論爭を旨として述べられたということを計算にいれておく必要がある――とも映じたのである。

かかる二律背反的にさえみえる外國貿易の規定、すなわち、政策的起動としては「基本的」な fondamental 重要性をもつが、政策的原型としては「前提的」な――しかし、「その效果においては非常に重要で不可欠の」（ルー・トウロー[13]）――規定、その一般的な評價的ヴィジョンであるかの如き、「必要惡」としての貿易の規定〔それは『經濟表』の概想が確立した后の後期の論爭的な著作や、かれの弟子の著作にうかがえる〕、しかしそれらは、かえつて『經濟表』自体にひそむ政策的含意を逆にわれわれに示唆しているのであつて、そこでは、單に國內市場の育成とその確保というに止らず、完全な內部的自足經濟圈の確立が政策的に指向されていたものと考えられる[14]。それとともに、『經濟表』――それは經濟社會の內部構造的な法則の解明を意味しているのだが――において、單に擾乱的な要素を捨象して理論の純粹性を保持するための理論操作として閉鎖的な經濟を想定したというよりはむしろ、より

積極的にこそでは、かれの政策的原型たる實在の構造が浮彫りにされたといえよう。

かれのシュリー公の讃美[15]や中國社會の謳歌は、單にコルベールの政策やモンテスキューの政治論にたいするアンチ・テーゼ――政策的效果の打算を內包した――であるというだけに止らず、そこには、みぎに述べられたような意圖がひめられていたと思われるのであるが[16]、それは端的にいえば、國際間の普遍的な自由經濟秩序を前提とし〔それは國際價格機構に、恒常的な安定性をあたえる〕これに機能的に感應しうる漏出孔をもつ――したがつて單なるアウタルキーに赴くことなく國際經濟的な安定性という利益を最大限に活用する――完結的な自足經濟圈の確立であるといえよう。しかも、かれによればそれは平和的な西歐的秩序の中樞的な存在とみなされた。だからこそ、かれは「事實においてフランスはその領土の廣さと肥沃さとによつて、また自國生產物の輸出貿易上の有利な立場によつて、非常に勢威ある地位にのしあがることができ、その結果、賢明なる君主にたいして、諸隣邦の審判者にして且つヨーロッパの平和の主宰者たるの榮譽のほかは何らの野心をもいだかせないほどになるであろう[17]」といいえたのである。國際分業上の自然的基礎の優越性に依據し、「加工的」な從つて技術的傳播的な商品の「侵害的」な輸出競爭に併呑されることなく――この苦杯は長年の英・佛戰爭の經驗によつてかれには酷烈さをもつた――、「自然的」な從つて非傳播的な分業的立地に基づく、自足經濟圈的フランスの確立、この「一農業王國」が樞点となることによつて、あるいは少くともイギリスと「均衡する」ことによつて、再編成される世界的秩序、それこそ普遍的な「自然秩序」の實質的な構成內容であり、かれの平和的秩序の經濟的な構想であつた。

ケネーはあるところで[18]、――それは自說の擁護と重商主義者にたいする論駁を意圖した著作であるが――「政治的投機業者」 spéculateurs politiques によつて曳きづられた獨占の秩序にたいして、完全な自由競爭の秩序を意

味した「自然的秩序」は、「正義にして善なる神」Dieu juste et bien の欲したものだ、といつたが、この「至高存在」の意欲とは、政策的具体的には、諸列强の抗爭裡に窒息したフランスの「國民的利益」intérêts de la nation——それは特定の經濟權益を主軸とするものだが——の意欲であつたといえよう。さらに、そこにいわれる神的存在は、奥深いデイスムの確信に裏打ちされていたとはいえ、その政策的效果という觀点からすれば、特定階層の經濟權益の打破のために同時代人の同感を買うためのスローガン的意味——その概念自体の分析がそこでは不問にふされて無定型的に利用されておればおるだけに——をも擔つていたといえよう。かれは、矛盾を内包し瓦解が豫感された現存の「リヴァイアサン」の体軀にたいして、——まず第一の處方として——力をもつて對抗させるかわりに、甘美なしかし或る者にとつては苦い毒藥をもろうとした。「自然的な」自由競爭がそれであつた。かく、そこには研ぎすまされた政策的意圖と强烈な利害の打算——それには奥深いデイスムの確信と半ば絶望的な現實感とがいりまじつているのだが——とが祕められているのに、ケネーは、啓蒙期のある人々を魅了する句調で「權利・秩序・法は自然から生れたものであり、恣意的な規則とか支配とか强制とかは人間から生れたものである」[19]ともらしたのである。

(1) Quesnay, Question intéressantes sur le population, l'agriculture et le commerce, 1758, Œuvres, p. 292.

(2) cf., Quesnay, Œuvres, pp. 236-237, 335, 344-345.

(3) cf., Oncken, op. cit., s. 369, ss. 184-185.

(4) cf., Quesnay, op. cit., Œuvres p. 294 Note (1) 「自國の生産物の輸出貿易は唯一の基本的な貿易であり、それが所有的に王國に直結しているから、それだけに貴重なものである。これに反して、手工業品ならびに奢侈品の輸出貿易は、全く

土地に直結せず、そのためにそれは諸外國に分割されてそれに從う國々によつて侵害されるおそれがある」（傍点筆者）。この后者のシステムは明かにコルベールのそれをさしている。　cf., Quesnay, Œuvres, p. 262 Note 1, pp. 343-344

(5) Quesnay, Questions, Œuvres, p. 294 Note 1

(6) Quesnay, Observation importantes, Œuvres, p. 321 Note 1

(7) 國際間の自由競爭制度における「價格の普遍的な平準作用」については、　cf., Quesnay, Œuvres, pp. 248, 322, 463-464, 466 ; Hommes, p. 22, 27 ;　Mercier de la Rivière, L'ordre naturel et essentiel des sociétés politiques, op. cit., pp. 545-536 ; Le Trosne, De l'intérêt social……, op. cit., p. 968　自由競爭制度の設定に基づく良價水準の維持が及ぼす一連の經濟的效果に關しては、初期の著作『小作人論』『穀物論』『人間論』を參照されたい。そのほか、とくに cf., Quesnay, Œuvres, p. 207, 323-324, 393-394, 322 Note (1) 464, 466, 669　「良價」のいわば觸媒的作用を主軸とした自由競爭機構はスミスとほぼ同じく psychologico-social に個人の「利己心」の發動をめぐつて展開されるとみなされる。　cf., Quesnay, Œuvres, p. 321 Note (1), pp. 681-682 ; M. de la Rivière, op. cit., p. 566　かくて、自由競爭秩序におかれた場合、個人の「利己心」intérêt は「唯一の適切な審判者」であり、それは「公共の利益」intérêt public と一致するものであつた。ところが、「商業上の獨占」的秩序においては、「私的利益」は「一般的福祉」のヴェールにかくれて「自然的秩序」を顚倒するものと映じた［cf., Œuvres, p. 321 Note (1)］。しかも、フィジオクラートにおいては、社會心理的領域は――社會道德的秩序として――社會物理的秩序の派生であつて、決して一般のモラリストの說くようにその根源ではなかつた。ここに社會物理的秩序とは、かれらによれば、結局農業を基軸とした經濟的秩序にほかならなかつたのである。 cf., A Dubois, op. cit., p. 223 ; G. Weulersse, op. cit., pp. 205-210

(8) E・ラブルースのすぐれた實証によれば、ケネー學說が生成しようとしたとき（一七五八年まで）は、趨勢的にいつて穀價は低落傾向を示しているし、特に、一七五五年は全十八世紀を通じて最低價格水準を示している。この故にこそケネーにおいては「良價」――「最初の賣手」の「實上價値」のいわゆる「自然的狀態」――が、現存の價格狀態におかれた場合は「高價」《cherté》として考えられたのである。メルシエがこの「高價」という表現をしりぞけた所以は、かれの著作 (L'ordre naturel et essentiel des sociétés politiques) の公刊が穀價が急騰し、そのために農民一揆が蜂起しようとした一七六

七年であつたことを思えば、自ら明かであろう。 cf., C.-E. Labrousse, Esquisse du mouvement des prix et des revenus en France au XVIIIe siècle, 1933, Tome 1, pp. 237-242, p. 239 Graphique XXVI ; G. Weulersse, op. cit., pp. 129-132 ; N. J. Ware, op. cit., pp. 616-618 ; R. Gonnard, Histoire des doctrines économiques, 1921, Tome 2, pp. 65-66

(9) 「一國においては、收入を形づくり支出を回收する價格〔良價のこと〕と販路とに應じて、はじめて生産物の豊富さがもたらされる筈である。これに成功するためには外國との貿易をいたつて便利にすることが根本的である」……統治の主眼は貿易によつて土地の生産物の販賣を容易にすることである」 「自國の土地生産物の輸出貿易は唯一の基本的な貿易である」「わが穀物の外國に對する販賣の自由は、王國内に農業を再興するために不可欠の、かつ本質的な方策である。 cf., Quesnay, Hommes, op. cit., p. 22, Œuvres, p. 294 Note 1, p. 183. なお cf., Mercier de la Rivière, op. cit., p. 546 「貿易の作用によつてもたらされる直接の効果は、再生産にあてられた富が利潤を伴つて《avec profit》生産的階級に回收され、且つこの階級が自己の耕作を改良するためのより多くの資金と改良を施すについてのより一層の関心をもつに至るということである」

(10) cf., Quesnay, Œuvres, pp. 323-324, 393-394

(11) Quesnay, Œuvres, p. 309. なお、この点については、久保田明光、前掲書、二三六—二三九頁參照。

(12) Quesnay, Œuvres, p. 484. なおこの点については、Mercier de la Rivière, op. cit., pp. 547-548 參照。

(13) 『經濟表』における「前提として」の貿易の性格を解明するにあたつて次のル・トゥローヌの言葉は、示唆的である。「外國貿易はそれ自体としては殆んどとるにとらないものだとしても、それは、國内における生産物の價値に影響を及ぼし、國内價格を普遍的な價格水準にたえず維持するかぎり、決定的に重要である。……國内消費、販路ならびに價額は限られていてそれ以上には增加しえない。しかし、外國貿易によつて、一國民は諸隣邦の間に成立する價格水準を恒常的に維持し、國内での販賣をこの價格でおこなう」〔傍点筆者〕Le Trosne, op. cit., pp. 964-965.

(14) 外國貿易が「仕方のないもの」《pis-aller》という所以は、フィジオクラートによれば、外國貿易は流通費用、運送費がかさみ、それだけ「收入」＝「純生産高」を蚕食するむきがあるから、ただ國内市場の補完部分としての存在理由をもつ

ものと考えられたからである。cf., Quesnay, Œuvres, p. 419 Note (1); Mercier de la Rivière, op. cit., p. 547, 548 だからといつても、「增進的繁榮の秩序」《ordre de prospérité croissante》(Œuvres, p. 481 Note (1)) にいたる政策的始動としての外國貿易の根本的重要さと『經濟表』世界の價格維持機能としてその「決定的重要性」とは否定されえない。外國貿易を「仕方のないもの」と規定した真の理由は、完結せる自足經濟圈を政策的に指向する『經濟表』世界の立場から逆にそれを回顧的に考察したという点に求むべきであろう。

(15) Quesnay, Œuvres, p. 262 Note (1)

(16) 大塚久雄、前掲書、二二九頁（6）參照

(17) Quesnay, Questions intéressantes, Œuvres p. 262 note 1.

(18) Quesnay, Du commerce, Œuvres p. 484

(19) Ex natura jus, ordo et leges : ex homine arbitrium, regimen et coercitio (G. H. de Romance de Mesmon, Eloge de François Quesnay, Œuvres p. 100 note 1)

（補論）　ここではケネーの國際經濟的構想について「普遍的な自由制度を前提とし、これに機能的に感應しうる漏出孔をもつた完結的な自足經濟圈の確立」と規定したのであるが、この点について諸見解を批判的に吟味してみよう。まず、J・ウェア（N. J. Ware, The Physiocrats : A study in economic raitonalization, op. cit., p. 607）は「外國貿易についていえば、フィジオクラートにとつて、それは一時的な手段にすぎなかつた。かれらの意圖に從えば、一たん外國貿易によつて地主の過剩收穫が良價に維持され、それによつて、地主を救うという目的がはたされたあかつきには、それ（外國貿易）を全く撤廢することにあつた」（傍点筆者）という。ここで私は未だフィジオクラート學說の社會史的意味づけについてはふれていないが、かれはそこでフィジオクラートの「自足經濟圈」的指向を示唆している。ただし、かれは再生產の運行を可能ならしめる價格維持機能としての外國貿易の役割を過少評價しているむきがある。この意味において外國貿易は――漏出孔として――決して撤廢されえないからである。從來、フィジオクラートの經濟的自由主義の性格づけを問題にして、そこから、當學說のもつ政策的指向ないし政策的意圖の規定にまで進み、H・チュルシー、S・ジウルダン、R・ゴナール、G・ウーレルス等に

みられるように、「反コルベール主義」「農業の再建」「自由貿易論者というよりはむしろ重農主義者《agrariens》」「農業的利害の擁護者」等というのが一般であつた。cf., H. Truchy, op. cit., pp. 929, 941, 939-940, 950; S.-Jourdan, pp. 707-708; R. Gonnard, op. cit., p. 33; G. Weulersse, op. cit., p. 306　かかるテーゼは、つまるところ、A・スミスの「重農主義學說」の規定を實質的には一歩も出ないものであり、それが具体的に且つポジティヴに如何なる政策的指向をもつかは明かではない。C・M・チッヒアウエルの見解　(C. M.-Tichauer, F. Quesnay als politischer Oekonom, 1927, ss. 6-7, 64-68)　――それは一般のフィジオクラート參考文獻からはもれているが――は、主題にとつて最も示唆的なものの一つである。かの女によれば、「ケネーにとつては完全な閉鎖的〔ケネーは『經濟表』世界においても漏出孔としての外國貿易を前提しているからこの表現は適切ではない〕國民經濟《die absolut geschlossene volkswirtschaft》が發展の極限に立つ」のであり、ついでかの女は、「安定性」と「永續性」とを强調した「自然秩序」のもつ「具体的な意味」を把握すべき必要をとき、それを以て「過度に走りやすい重商主義的な國際的競爭に對して、ケネーの經濟政策は、永遠的なものとみなされた不易の終極狀態〔すなわち、完全な閉鎖的國民經濟〕への發展をあらわすもの」(傍点筆者)と考えた。M・ベアーは、その斬新な試み (M. Beer, An Inquiry into Physiocracy, 1939) において『經濟表』世界に關して、「われわれは、重商主義的な貿易差額論の擡頭と製造業の伸張とに先立つ靜的な社會《static society》――中世社會がそうであつたような――に直面する。その社會の富は、農業の年々の產出高によつて限定され、三階級の身分に應じて分配される。そこにはみぎの限界に壓力を加えたり、或いは安定的な均衡をみだすような動的な階級は存在しない。つまり、そこには擴大への刺激がないのである。人口の增加は年々の生產高に依存しているし、發明のときは存しない」(M. Beer, ibid., p. 169) といいえた。かくてかれによれば、『經濟表』に結晶したフィジオクラシーの指向ないし意圖は「中世的經濟生活の合理化」rationalization of medieval economic life ないし「中世社會の再建」re-create a medieval society であつた。(cf., M. Beer, ibid., pp. 110, 147-148, 164, 167-170) フィジオクラシーの指向に關するベアの性格づけに對しては、なお異論なしとしない〔例えば横山正彥、ケネー商業論とその歷史的意義、經濟評論、昭二三、三・四月号、四一頁を參照〕、慥にかれはその守旧的側面を强調しすぎたが、少くともかれのケネーに對する直觀的形象においては、その一面を鋭くつくものがあるように思われる。